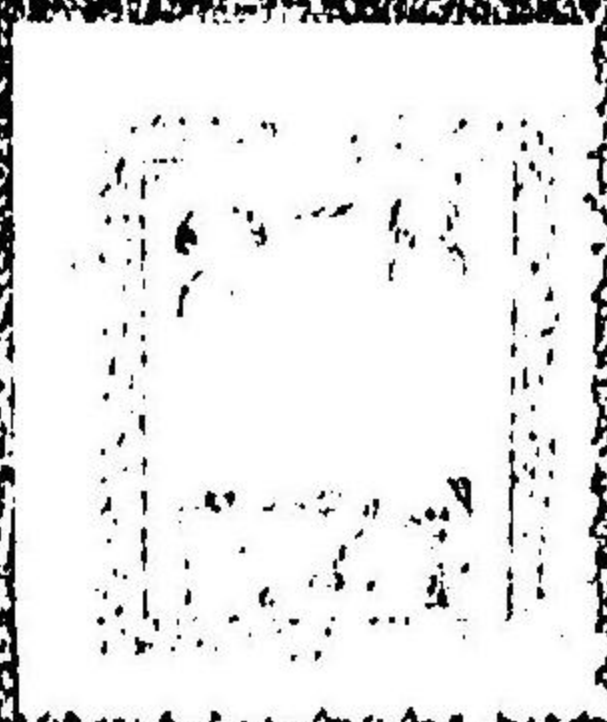


WHO IS JESUS CHRIST?

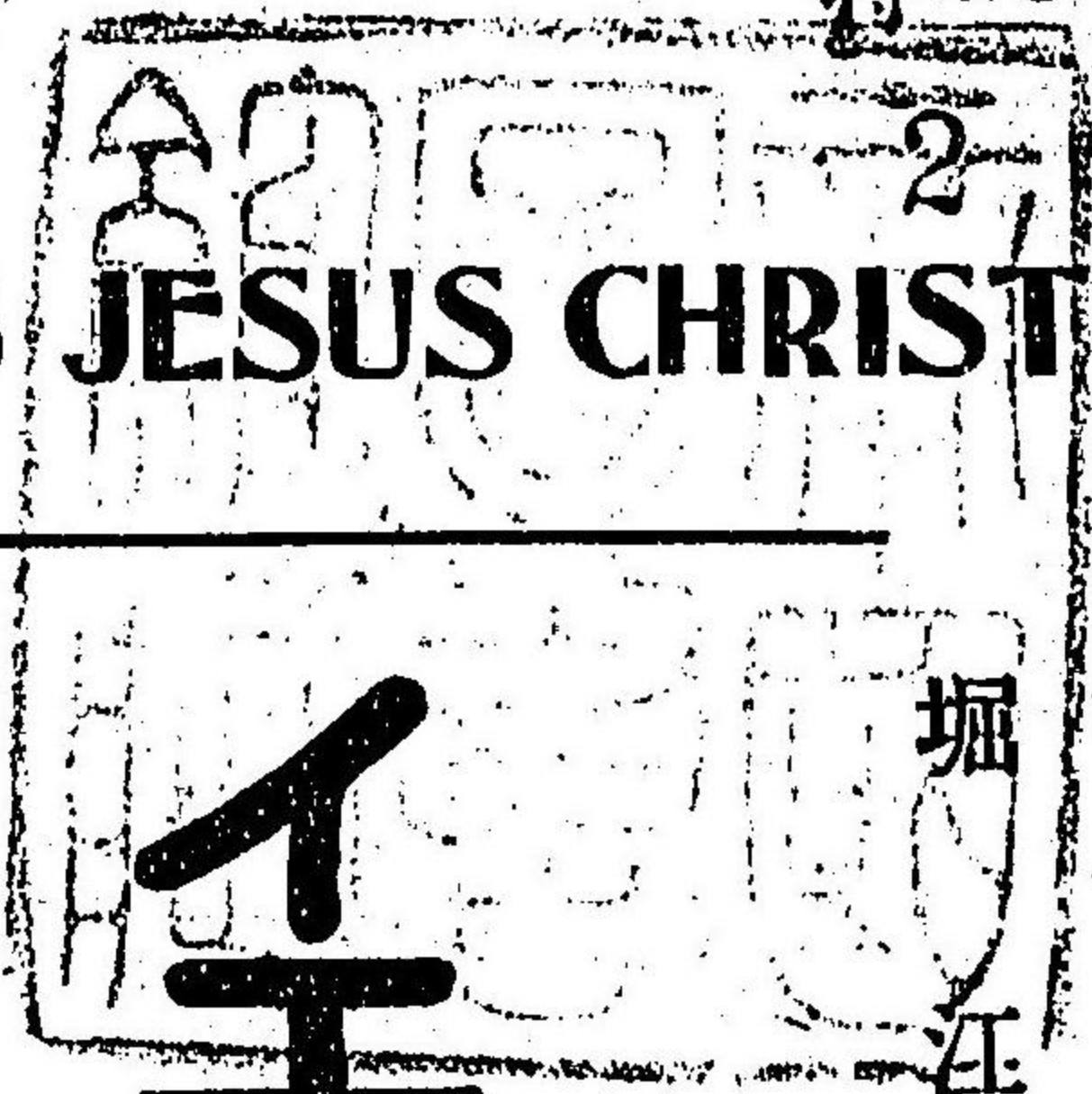
イェズスキリスタの誰か

新約聖書



特45

WHO IS JESUS CHRIST?



イエスキリストは誰か

堀江

エツナ、リンドストロム

議作

共編

發行所 廣島アライアンス教會

明治
41 9 7
内交

イエスキリストは誰か

目次

第一章	ゲツセマ子の祈禱	五
第二章	就縛	八
第三章	祭司の長の審問	三三
第四章	公廳に於ける審問	三九
第五章	十字架	七七
第六章	復活	三六
第七章	昇天	四三

イエスキリストは誰か

今より凡そ一千九百年前、我地球の上に最も不思議な人物が顯れ、
した。其名をイエスキリストと稱し、今に至るまで、世々萬國の人は、其
何人たるかを知らんとして、之を研究し、又論議して居ます。基督信者
は、聖書が神の默示に因りて、録された書物であることを信するが故
に、聖書に依りて、イエスキリストは、天地の造主なる神の獨子で、世の
救主たることを明かに信じます。

キリストは、三十三年間、餘此世に在つて、神の國の事を人間に傳へ、遂
に世の罪を一身に負ひ、すべての人間の身代りとなつて、十字架の上

に死給ひました。其傳記は、キリストと偕に在つて直接に其口より教を聞き、又各様の奇跡を見たる、二人の弟子と二人の熱心な信者とに依つて、録されたもの。即ち馬太傳馬可傳路加傳約翰傳の四種あります。尙斯様な人に依つて、キリストをあらはしたる二十三種の書を、之に合せて、新約聖書と申します。

故に、キリストの何人かを研究するには、新約聖書全部を調べなければなりません。恰も一つの大火事を四方面から見つた四人の記者に依つて、録された四つの記事があるとするれば、之を悉皆讀了て始めて、其出來事の全体を知ることが出来るのと同じ事でありませぬ。

キリストの、此世を去り給ふ前後數日の出來事は、最もよく、其何人た

るかをあらはして居ますから、今此小冊子に、其數日の出來事だけを、専ら四つの傳記から引き、其字句の儘を連ねて、出來事の全体を一讀きに讀むことの出來る様に綴り、キリストの何人たるかを研究せんとする人の、参考に供へんとするものであります。

編者謹識

第一章 ゲツセマネの祈禱

ガリラヤより始め、諸方を遍歴きて、エダヤの首都エルサレムに入り、最
 早神の廟の事を傳へ終り、己の身に十字架の近いたこゝを知つて、或木曜日の夜、弟
 子等と共に晩餐を食して、逾越の節を守り、夜更くるまで、名残を惜んで後の事など
 語り、共に眼笑の歌をうたひて後、弟子たちを従へて、邑はづれなる橄欖山に往き、ゲ
 ツセマ子の園の中に熱き祈禱を捧げられました。されど弟子等の中に、是が最後の
 集會であるこゝを覺つて居たものが、一人も無かつたのは、是非もない事でありま
 した。

イエス此事を言ひ、歌を謳ひて後例の如く出てケデロンの河を涉り、其
 處に在る橄欖山に往けるに、其弟子も従へり、其時イエス彼等に曰ける
 は、今夜爾曹皆我に就て寝かん、蓋我牧者を撃ば、群の綿羊散らんと録さ

イエスキリストは誰か

れたればなりされど我甦りて後、爾曹に先ちてガリラヤに往べし。ペテロ答へてイエスに曰けるは、皆なんぢに就て礙くとも、我は終に礙かじ。イエス彼に曰けるは、我まことに爾に告げん、今日この夜、雞二次鳴く前に、爾三次我を知らずと言はん。ペテロ力言いひけるは、我は主と偕に死るとも、爾を知らずと言はじ、弟子皆如此いへり。

其時イエス彼等と偕に、ゲツセマ子といふ處に至れり、イエスを賣したるユダ、此處を識れり、イエス屢其弟子と偕に此に集りたればなり、イエス弟子等に曰けるは、爾曹此處に坐れ、我彼處に往きて祈らん。イエスベテロと、ゼベダイの二人の子ヤコブとヨハ子とを携へ、憂ひ哀みを催し、彼等に曰けるは、我心いたく憂ひて死るばかりなり、此處に待ちて、我と

偕に目を醒し居れ、誘惑に入らぬやう祈れ。イエス彼等を離れて、石の投げらるゝ程隔り、曲膝地にひれふして祈り曰けるは、若叶は、此時を去らしめ給へ、又曰けるは、アバ父よ、爾に於ては凡ての事能はざるなし。此杯を我より取たまへ、然ど我が欲ふ所を成さんとするに非ず、爾が欲ふ所に任せ給へ。イエス來りて其弟子の寢たるを見、ペテロに曰けるは、シモン、爾寢たるか、一時も目を醒し居ること能はざるか、誘惑に入らぬやう目を醒し且祈れ、その心神は願ふなれど、肉體よわきなり。二次ゆきて復祈り曰けるは、父よ、若我に此杯を飲さで離つこと能はずば、聖旨に任せ給へ、返りて復かれらの寢たるを見る、此は彼等其目倦れたるなり、イエスに何を對ふべきやを知らざりき、彼等を離れて、又ゆき、第三次も同

言を以て祈れり、父よ若し聖旨に背はらば、この杯を我より離ち給へ、然れども我心に非ず、たゞ聖旨のまゝに成したまへ。

使者天より彼に現れて、健壯を添へぬ、イエス痛く哀み、切に祈れり、其汗は血の滴の如く地に下たり。

祈禱より起て弟子に來り、彼等が憂ひて寝れるを見、曰けるは、今は寢て安め充分なり、時至れり、人の子は罪人の手に賣さるゝなり、起よ我儕ゆくべし、我を賣すもの近けり、誘惑に入らざるやう祈れ。

第二章 就縛

斯いへる時直ちに十二の一人なるユダ、刃と棒とを携たる多の人々と

共に、祭司の長、學者及び長老の所より來る、炬と桃灯と兵器を携へて此に來れり、イエスを賣すもの彼等に號をなして曰けるは、我が接吻するものは其なり、之を執へて慎と曳去れよ。

イエス事の己に及ばんとするを悉く知り、出で、彼等に曰けるは、誰を尋ぬるか、彼等答へけるは、ナザレのイエスなり、イエス彼等に曰けるは、我は其なり、イエスを賣し、ユダ彼等と共に立り、イエス彼等に對ひて我なりと曰たまへる時、かれら退きて地に仆れたり、イエス復彼等に誰を尋ぬるか、と問ひ給ひしかば、彼等ナザレのイエスなりと曰ふ、イエス答けるは、我すでに爾曹に我は其なりと曰り、若われを尋ぬるならば、此輩を容して去しめよ、是イエス我に賜ひし者の中一人だに亡ぶるもの

なしと云し言に應せん爲なり。

ユダ其に先ちて、イエスに接吻せんと近よれり。直ちにイエスに來り、ラビ安きかと曰て彼に接吻す。イエス彼に曰けるは、友よ何の爲に來るや。ユダ爾は接吻をもて人の子を賣すか。遂に彼等進み來り手をイエスに措きて執へぬ。

その側に居たる者ども、事の及ばんとするを見て曰けるは、主よ我儕及をもて撃べきか。時にシモンペテロ刃を佩たりしが之を抜き祭司の長の僕を撃て其右の耳を削おとせり。僕の名はマルコスといふ。イエス答へて之を釋せと曰ひ、イエス彼に曰けるは、爾の劍を故處に收めよ。凡て劍を取るものは劍にて亡ぶべし。我いま十二軍餘の天使を我父に請て

受ること能はずと爾曹おもふや。父の我に賜し杯を我飲ざらんや。若然せば斯此あるべき事を録し、聖書に如何で應はんやとイエス其耳に捫りて醫したり。

此時イエス人々に曰けるは、劍と棒とを持って盜賊を執ふる如くして我を執へに來るか。我日々爾曹と偕に殿に坐して誨へしに、爾曹我に手を措ことなかりき。然るに今は爾曹の時且黑暗の勢なり。然ど此の如くなるは皆預言者の録したる所に應成せん爲なり。遂に弟子等みなイエスを離れて逃げ去りぬ。

一少者その身にたゞ麻の夜具を蔽てイエスに従ひたりしが、逮捕の者等これを執ければ、かれ麻の夜具をすて裸にて逃去れり。

斯て隊の兵卒及其長と、ユダヤ人の下吏イエスを執へ繋りて、先之をア
ンナスの所に曳往く、かれは此歳の祭司の長、カヤバの外舅なるに因て
なりユダヤ人に議りて、一人民の爲に死るは益なりと言しは此カヤバ
なりき。

イエスを執へたる者、これを曳て學者と長老の集れる所の祭司の長カ
ヤバに携ゆく、シモンペテロと外に一人の弟子、遠く離れてイエスに従
へり、此一人の弟子は祭司の長の識る所の者にて、イエスと偕に祭司の
長の庭に入り、ペテロは門外に立ち、祭司の長の識る所の弟子出て門を
守る婢に告て、ペテロを伴ひ入る。

僕等と下吏たち、寒に困りて炭を焼き、その處に立て煖る。ペテロも彼等
と偕に立て煖れり、是に於て門を守る婢ペテロが火の傍に坐せるを見
これを熟視て曰けるは、爾もガリラヤのイエスと偕に在りし一人なら
ずや、彼の弟子の一人ならずや、ペテロすべての人の前に此言を肯はず
して、女よ然らず我之を識らず、亦爾が言ふ所の事を識得ざるなりと云
へり。

第三章 祭司の長の審問

祭司の長イエスに其弟子と其教のことを問ぬ、イエス彼に答けるは我
あらはに世に語れり、我常にユダヤ人の平生集る所なる會堂および殿
にて教をなし、隠に語れることなし、何ぞ我に問ぬるや、我如何に語りし

か聽る者に問ねよ、彼等我が言し所を知れり、イエス如此言しに、旁に立
 てる一人の下吏掌にて、彼を打ち曰けるは、爾祭司の長に答ふるに、此の
 如きか、イエス彼に答けるは、若我語りしこと善らさば、其善らざるを證
 せよ、若善くば、何ぞ我を打や。
 此時ペテロ庭門に出ければ、雞鳴きぬ、頃刻して他の婢も亦之を見て、其
 處に居る者に曰けるは、此人もナザレのイエスと、偕に在りき人々、ペテ
 ロに向ひ曰けるは、爾も彼の弟子の一人ならずや、他の人も亦曰けるは、
 爾も彼等の一人なり、ペテロ肯はずして、誓ふ人よ、我は然らず、我この人
 を知らずと、約そ一時ほど、過て復ほかの人力言けるは、爾誠に彼の黨の
 一人なり、蓋爾はガリラヤの人なり、其方言これに合り、祭司の長の僕の

中の一人、すなはちペテロに耳を削れし者の親戚いひけるは、我爾が彼
 と偕に園に在しを見しに、あらずや、是に於てペテロ誓て、我神の祟を受
 るとも、爾曹が言ふ其人を、我は識ざるなりと言ひも、果てず、雞二次鳴き
 ぬ、主身を回して、ペテロを見たまへり、ペテロ、イエスの、雞二次鳴く前に、
 三次我を識らずといはんと、言たまひし事を憶起し、外へ出て、痛く哭り。
 祭司の長等および長老すべての議員ともに、イエスを殺さんとして、妄
 證を求めども、得ず、多の妄の證者來れども、亦得ず、多くの人々、イエスに
 妄の證を言出せども、其證合はず、後又妄の證者二人來りて曰けるは、彼
 よく手を以て作りたる此聖殿を、毀ち三日の間に、手を以て作らざる別
 の殿を建得べし、且之を建てんと言しを、我儕は聞けり、如此いひしが、其

證あかしまた符がはず祭司さいしの長中ながなかに立たてイエスに問まひけるは、爾なんぢ答こたふることなきか、この人ひと々々爾なんぢに立たる證しょうこ據こは如何いか、イエス默もく然ぜんとして何なにも答こたへざりき。

祭司さいしの長ながまた彼かれに問まて曰いけるは、爾なんぢは願ねがひべき者ものの子こキリストなるか、イエス彼かれに曰いけるは、然しかり爾なんぢが言いふ如ごとし且かつわれ爾なんぢ曹そうに告つげん、この後人のちひとの子こ大權ちからの右みぎに坐まし、天てんの雲くもに乗のりて來きたるを爾なんぢ曹そう見みるべし、是こゝに於おて祭司さいしの長なが其その衣ころもを裂さて曰いけるは、此人このひとは褻けが瀆すことを言いへり、何なんぞ外ほかに證しょうこ據こを求めんや、爾なんぢ曹そうも今いま其その褻けが瀆すたることを聞きく、爾なんぢ曹そう如何いかにおもふや、彼等かれら舉こりて曰いけるは、彼かれは死しに當あたれり。

イエスを護まもれる者ものども嘲あざわ弄うして、或者あるものは彼かれに唾つばし、又また其その面かほを掩おほひ拳こぶしにて

撃うち、また或人あるひとは彼かれを批たき曰いけるは、キリストよ、爾なんぢを撃うつものは誰たれか、我われ儕らに預よ言げんせよ、また多端さまぐの事ことを言いて之これを誦それり。

平旦よひの明けに及および直ただに祭司さいしの長なが老學らうがく者しやたちすべての議員ぎいんと共に議ぎりて、イエスを殺ころさんとし、集議所しゅうぎしよに曳ひ往ゆて曰いけるは、爾なんぢ若もしキリストならば、我われ儕らに告つげよ、イエス曰いけるは、假令たとひ我われ爾なんぢ曹そうに言いふとも信しんせざるべし、又また假令たとひ我われ爾なんぢ曹そうに詰こふとも答こたへざるべし、今いまより後人のちひとの子こは大權ちからある神かみの右みぎに坐ません、皆みないひけるは、然さらば爾なんぢは神かみの子こなるか、イエス曰いけるは、爾なんぢ曹そうが言いふ如ごとし、我われは是こゝなり、彼等かれら曰いけるは、猶なほ證しょうこ據こを須もちんや、我われ儕らみづから其その口くちより聞きり、衆人しゆじん皆みな起たちて、イエスを縛しばり、カヤパより公廳くうしやうに曳ひ往ゆて、方伯かつかのポンテオピラトに解わせり、時既ときすでにに平旦よひの明けなりき。

是に於てイエスを賣し、ユダ彼の死に定られしを見て悔み、其銀三十を祭司の長長老等に返して曰けるは、無辜の血を付し、我は罪を犯しぬ。彼等曰けるは、我儕に於て何ぞ與らんや、爾みづから當るべし、ユダ其銀を殿に投棄て其處を去り、ゆきて自縊れ、倒に墮ちて、真中より裂れ、其腸盡く流出たり。祭司の長等この銀を取て曰けるは、此は血の價なれば、賽銭の箱に入るべからずとて、共に謀りこの銀をもて、旅客を葬る爲に陶工の田を買ひ、この事エルサレムに住める凡の人に知れしかば、其地所を今に至るまで、方言にてアケルダマと呼ぶ、これを譯ば血の地所なり。是に於て預言者エレミヤに託りいはれたる言に、イスラエルの民に估られ、估られし者の價の銀三十を取り、主の我に命せし如く陶工の田を

買ぬとあるに應へり。

第四章 公廳に於ける審問

ユダヤ人汚穢を受けんことを恐れて公廳に入らず、蓋踰越の節筵を食せんとすればなり、ピラト出で彼等に曰けるは、如何なる訴をもて斯人を認るや、人々答けるは、彼もし惡を行る者に非ずば、爾に解さじ。ピラト彼等に曰けるは、爾曹之を取り、なんぢらの律法に従ひて審判せよ。ユダヤの人々かれに曰けるは、我儕に人を殺すの權なし、是イエスの其死んとする狀を指て、語れることに應へり。之を認へ曰けるは、我儕この人が民を惑はし税をカイザルに納むることを禁み、自ら王なるキリストと

稱ふるを見たり。

ピラト又公廳に入りイエスを召びて曰けるは爾はユダヤ人の王なるや。イエス彼に答けるは、爾この事を言るは自らに由るか。我に就て人の告げしに由るか。ピラト答けるは、我はユダヤ人ならんや。爾の國の民と、祭司の長と、爾を我に解せり。爾何を爲し、や。イエス答へけるは、我國は此世の國に非ず。若わが國この世の國ならば、我僕われをユダヤ人に付さる爲に戦ふべし。然どわが國は此世の國ならざるなり。ピラト彼に曰けるは、然ば爾は王なるか。イエス答けるは、爾の言ふ所の如く、我は王なり。我これが爲に生れ、これが爲に世に臨れり。蓋真理について證をなさん爲なり。すべて真理に屬く者は、我聲を聴く。ピラト彼に曰けるは、真

理とは如何なる者ぞ。此事を言へる後、また出てユダヤ人に曰けるは、我は斯人に罪あるを見ず。祭司の長、長老たち彼を訴ふれども、何の答もせず。ピラト復イエスに問て曰けるは、何も答へざるか。彼等が爾について證を立てしこと幾何ばかりぞや。爾聞かざるか。方伯の甚奇しとするまでに、イエス一言も答せざりき。彼等ますく極力いひけるは、彼はガラヤより始めて遍くユダヤを教へ、此處まで來り民を亂せり。ピラト、ガラヤと聞きて、此人はガラヤ人なるかを問ひ、其へロデの所管なるを知りて之をへロデに遣る。此時へロデもエルサレムに在りしが、イエスを見て甚喜べり。蓋各様なる彼が風聲を聞て、久しく之を見んことを欲ひ、且その奇異なる事を見んと望み居たればなり。此故に多

言を以て問けれ共イエス何をも答ざりき。祭司の長學者たち側に立て、切に彼を訟へぬ。ヘロデ其士卒と共に彼を藐視嘲弄して華服を衣せ復ピラトに遣れり。ピラトとヘロデ先には仇たりしが、當日たがひに親を爲り。

ピラト祭司の長有司及民等を呼集めて曰けるは、爾曹この人を我に携來りて民を亂したるものとなせり。我爾曹が訟ふる所を以て、爾曹の前に鞠げども其罪あるを見ず。ヘロデも亦然り、爾曹をヘロデに遣せども、彼もイエスが行事の死罪に當るを見ざりき。故に我答ちて之を釋さん。この祭り日には、方伯より民の願に任せて、一人の囚人を釋すの例あり。時にバラバといへる一人の名高き囚人あり、己と共に謀叛せし黨と同

じく繋がれ居たりしが、彼等は其謀叛の時人を殺し、者等なり、人々聲を揚げて呼はり、恒例の如くせんことを求へり。ピラト民の集りし時彼等に曰けるは、爰に爾曹に一の例あり、我逾越の節に一人の囚人を爾曹に釋す。バラバか又はユダヤ人の王キリストと稱ふる、イエスなるか、爾曹誰を釋さんと欲ふや、これ祭司の長娼妓に由てイエスを解したりと知ればなり。

ピラト審判の座に坐りたる時、その妻いひ遣はしけるは、此義人に爾干ること勿れ。蓋我今日夢の中に彼につきて多く憂たり。祭司の長長老たちバラバを釋し、イエスを殺さんことを求へ、民に唆む。方伯答へて彼等に曰けるは、二人のうち孰を我なんぢらに釋さんこ

とを望むや、彼等皆一齊呼はりて、此人を除き、バラバを我儕に釋せといふ。ピラトはイエスを釋さんと欲ひ、復彼等に曰けるは、さらばキリストと稱ふるイエスに、我何を處べきか。彼等皆呼はりて、之を十字架に釘よ十字架に釘よといふ。ピラト三次曰けるは、彼は何の惡事を行しや、我いまだ彼の死罪あるを見ざれば、笞ちて釋さん、彼等ますく、喊叫て、十字架に釘よといひ、尙厲く聲をたて、彼を十字架に釘んと言募れり、遂に彼等と祭司の長の聲勝ちたり。

其時ピラト、イエスを取て鞭つ、方伯の兵卒イエスを携へ公廳に至り、全營を其もとに集め、彼の衣を褫ぎて、絳色の袍衣を着せ、棘にて冕を編み、其首に冠らしめ、又葦を右の手に持たせ、且其前に跪き嘲弄して曰ける

は、ユダヤ人の王安かれ、斯て掌にて之を打てり、又彼に唾し、其葦を取て其首を撃ち、跪きて拜しぬ。

ピラト又外に出て、彼等に曰けるは、我彼に就て罪あるを見ず、之を知らせんとて、爾曹に曳出せり、イエス棘の冕をかぶり、紫の袍を衣て外に出づ。ピラト彼等に曰けるは、觀よ此れ其人なり、祭司の長等と下吏之を見て、十字架に釘けよ、十字架に釘けよと喊叫いふ。ピラト彼等に曰けるは、爾曹彼を取て十字架に釘けよ、我彼に就て罪あるを見ざるなり、ユダヤ人彼に答けるは、我儕に律法あり、其律法に従へば、彼は死べき者なり、蓋かれ自己を神の子と爲ばなり。

ピラト此言を聞て益懼る、また公廳に入て、イエスに曰けるは、爾何處の

者ぞイエス答せざりき、ピラト彼に曰けるは我に答せざるか、我爾を十字架に釘る權威あり、又爾を赦す權威あり、此事を知らざるか、イエス答けるは爾上より權威を賜はらずば、我に對ひて權威あることなし、是故に我を爾に解し、者の罪尤も大なり、其後ピラト彼を釋さんと謀る、然れども、ユダヤ人さけび曰けるは、若し之を釋さば、カイザルに忠臣ならず、凡て自己を王となす者は、カイザルに叛く者なり。

ピラト此言を聞きて、イエスを曳出し、鋪石と云る所へ、ブル言にて釋ば、ガバタといふ所の審判の座に自ら坐れり、其日は逾越節の備日にて、ピラト、ユダヤ人に曰けるは、爾曹の王を見よ、かれら喊叫て之を除け之を除け、十字架に釘よ、いふ、ピラト彼等に曰けるは、我爾曹の王を十字架に

釘くべけんや、祭司の長たち答へけるは、カイザルの外我等に王なし。ピラト其言葉の益なくして、唯亂の起らんとするを知り、民の憤びを取らんとして、其求の如く擬め、水を取りて人々の前に手を洗ひ曰けるは、此義者の血に我は罪なし、爾曹自ら之に當れ、民皆答て曰けるは、其血は我儕と我儕の子孫に係るべし。是に於て、彼等が求る、城下に一揆を起し人を殺して、獄に入りしバラバを釋し、イエスを鞭ちて、其意に任せ、之を十字架に釘ん爲に付せり。

第五章 十字架

兵卒等イエスを携へ、紫の衣をはぎ、故の衣を着せて、十字架に釘んとて

曳往きたり、イエス己の十字架を負ひて往けり。その出し時、アレキサン
 デルとルフの父なるクレ子のシモンといへる者、田間より来て其處を
 経過るに遇ければ、彼等之を執へ強て之れに十字架を負せ、イエスに従
 はせたり。

衆の民及び婦等も従ふ、婦等は彼を悲哀めり、イエス彼等を顧み曰ける
 は、エルサレムの女子よ、我爲に哭なかれ、惟己と己が子の爲に哭け、産ま
 ざる者未孕まざるの胎、いまだ哺せざるの乳は福なりと曰はん、日來ら
 ん、當時人々山に對ひて、我儕の上に壓れよ、陸に對ひて、我儕を掩へと曰
 はん、若し青木にさへ如此なさは、枯木は如何せられん。

また他に二人の罪人をイエスと偕に死罪に處はんとて曳往けり。

イエスを觸體と云へる所へブルの言にて曰ば、ゴルゴタと云ふ所に携
 來り、没薬を酒に和へて飲せんと爲たりしに、嘗めて飲むことをせざり
 き、彼等此ゴルゴタと云ふ所にて、イエスを十字架に釘たり、別に二人の
 盜賊、彼と偕に十字架に釘らる、一人は右に一人は左、イエス中に居れり、
 これ聖書に彼は罪人と共に算へられたりと云ひしに、應へり、朝の第九
 時にイエスを十字架に釘く、イエス曰けるは、父よ、彼等を赦し給へ、其爲
 すところを知らざるが故なり。

ピラト罪標を十字架につけ、此はユダヤ人の王なるナザレのイエスな
 りと書したり、許多のユダヤ人この罪標を讀めり、蓋イエスを十字架に
 釘し所は、京城に近ければなり、その標はへブル、ギリシヤ、ロマの言にて

書したり。ユダヤ人の祭司の長等、ピラトに曰けるは、ユダヤ人の王と書す勿れ、自らユダヤ人の王なりと言しと書すべし、ピラト答けるは、我書し、所すでに書したり。

兵卒どもイエスを十字架に釘けし後、その上衣を取り、四に分けて、各其一を取れり。此裏衣は縫なく、上より渾く織れるものなりければ、互に曰けるは、之を裂かずして、誰の屬にならんか。圖にすべし。此は聖書に、彼等互に我衣を分け、わが裏衣を圖にすと云ひしに、應はせん爲なり。兵卒どもこゝに坐して、イエスを守り、已に此事を行せり。人々立ちて之れを見たり。

諸イエスの母と母の姉妹及びクロバの妻のマリア、並マクダラのマリ

ア、其十字架の傍に立てり。イエス母と愛する所の弟子と傍に立てるを見て、母に曰けるは、婦よ、此れ汝の子なり。また弟子に曰けるは、此れ汝の母なり。此時その弟子かれを己の家に携れ往けり。

往來の者イエスを詭り、首を揺て曰けるは、噫、聖殿を毀ちて之を三日に建る者よ、自らを救へ、爾若し神の子ならば、十字架より下よ。祭司の長、學者長老たちも、同く嘲弄して互に曰けるは、人を救て自己を救ひ能はず。若キリスト神の選びたるユダヤ人の王ならば、自己を救て十字架を下るべし。然らば我儕見て彼を信せん。彼は神に依頼めり。神もし彼を愛しまば、今救ふべし。蓋彼は神の子なりと云しなり。同に十字架に釘られたる盜賊も、同くイエスを罵れり。兵卒ども亦彼を嘲弄し、來り醋を與へて、

爾若ユダヤ人の王ならば、自己を救へといへり。
 懸けられたる罪人の一人、イエスを譏りて曰けるは、爾若キリストならば、己と我儕を救へ。他の一人答て彼を責め曰けるは、爾同じく審判を受ながら、神を畏れざるか。我儕は當然なり、行せし事の報を受くるなれど、此人は何も不是事は行ざりしなり。斯てイエスに曰けるは、主よ、爾國に來らん時、我を憶ひたまへ。イエス答けるは、誠に我爾に告げん。今日爾は我と偕に樂園に在るべし。
 時約を十二時頃より三時に至るまで、遍く地の上、黑暗となり、日光くらみぬ。第三時に、イエス大聲に呼はり、エリ、エリ、ラマ、サバクタニと曰ふ。これを譯けば、吾神わが神、なんぞ我を遺て給ふやといへるなり。傍に立ち

たる者の中、或人之を聞きて、彼はエリヤを呼ぶなりと曰ふ。
 斯てイエス、諸の事の已に竟れるを知り、聖書に應はせん爲に、我渴くといへり。此處に醋の満ちたる器皿ありしかば、兵卒ども海絨を醋に漬し、牛膝草に束て其口に與へ曰けるは、俟てエリヤ來りて、彼を救ふや否こゝろむべし。イエス醋を受けし後、曰けるは、事竟りぬ。イエスまた大聲に呼はり曰けるは、父よ、我靈を爾の手に託く。如此いひて、氣絶ゆ。
 殿の幔上より下まで裂けて、二となり、又地ふるひ、磐さけ墓ひらけて、既に寢ねたる聖徒の身おほく甦り、イエスの甦れる後、墓を出で、聖城に入り、おほくの人に現れたり。イエスに對ひて立たる百夫の長と、偕にイエスを守りたる者、斯く呼はりて、氣絶しと、地震及び其有りし事を見て

甚く懼れ、此は誠に神の子なりといへり。又百夫の長神を崇め曰けるは、
 誠に此人は義人なりき。
 之を觀んとて聚れる衆人皆此ありし事等を見て、膺を拊て返れり。イエ
 スの相識の人々、およびガリラヤより隨ひし婦ども、遠く立て此等の事
 を見たり。其中に在し者は、マгдаラのマリア、及び年少ヤコブとヨセの
 母なるマリア、又ゼベダイの子等の母サロメなり。彼等はイエスのガリ
 ラヤに居たまひし時、これに従ひ事へし者等なり。亦この他にも彼と共
 にエルサレムに上りし多くの婦居たりき。
 是日は節筵の備日なり。此安息日は大なる安息日なれば、屍を十字架の
 上に置くことを欲まざるが故に、ユダヤ人ピラトに對ひ、彼等の脛を折

て其屍を取除くことを求へり。是に於て兵卒等、イエスと偕に十字架に
 釘けられし者の一人の脛を先にをり、次に亦一人の脛を折り、後にイエ
 スに來りしに己に死たるを見て、其脛を折らざりき。一人の兵卒戈にて
 其脊を刺ければ、直ちに血と水と流れ出でたり。之を見し者證を立つ、其
 證は眞なり。彼また自ら言ふ所の眞なるを知る。爾曹をして信せしめん
 が爲なり。此事成れり。録して其骨の一をも推かざるべしと有るに應は
 せん爲なり。又他の書に、彼等の刺し、者を彼等觀るべしと云へり。
 是日は備節日にて、安息日の前の日なりしゆゑ、日暮る、時ヨセフと云
 る富人來れり。この人は、ユダヤのアリマタヤの邑の善且義なる尊き議
 員にして、彼等の評議と行爲を肯はず。神の國を慕る者にて、前にユダヤ

人を懼れて、隠かにイエスの弟子となれる者なり。彼は憚らずピラトに往きて、イエスの屍を取らんことを求ふ。ピラトイエスの已に死るを奇み百人の長を呼で、彼は死てより時を経たるや否やを問ひ、百夫の長より聞て之を知り、屍をヨセフに予へ其屍を付せと命す。

ヨセフ臬布を買求め、また墓に夜間イエスに就りしニコデモといふ人、没薬と蘆薈を和せ、凡そ百斤ばかり携へ來る。彼等イエスの屍を取下して、ユダヤ人の葬の例に循ひ、之に香を塗り、麗しき臬布にて裹めり。さて十字架に釘けし其近傍に園あり、園の中に磐に鑿りたる新しき墓あり、これは未だ人を葬りしことなきヨセフの墓なり。是日はユダヤ人の節筵の備日なり、且安息日近きぬ、又墓近かりければ、其處にイエスを置き、

大なる石を墓の門に轉ばして去る。マгдаラのマリアとヨセの母なるマリアと、墓に對ひて坐し、其處に居れり。而してガリラヤよりイエスと偕に來りし婦たちも、後に隨ひて其の墓と屍を葬し、狀を見たり。彼等かへりて香物と香膏を備へ置きて、賊に従ひ安息日を休めり。

預備日の翌日、祭司の長とパリサイの人等、ピラトの所に集ひ來り曰けるは、主よ我儕憶起せり、彼の偽者いきて在りし時、三日の後、甦らんと言さ。是故に命じて、三日に至るまで墓を固守しめよ。恐くは、其弟子夜來りて之を竊み、死より甦りたりと、民に言はん。然らば後の惑は先よりも愈勝るべし。ピラト彼等に曰けるは、守兵は爾曹に在り往きて意のまゝに固守しめよ。是に於て、彼等ゆきて石に封印し、守兵をして墓を固守しめ

たり。

第六章 復活

イエス、キリスト、甦りし事によりて、明かに神の子たることを顯れたり(羅馬書一章四節)

キリスト若し甦らざりしならば、我々の宜ぶる所むなしく、また爾曹の信仰もむなしからん、然れど今キリスト死より甦りて、甦れたる者の復生の首となれり(哥林多前書十五章十四節より二十一節まで)

編者曰 甦りの出来事は、四つの傳記の儘を並べて記します。

馬太傳 二十八章一節より八節まで

安息日終りて後七日の首の日黎明に、マグダラのマリア、及び他のマリ

ア、その墓を覗んとて來りしに、大なる地震ありて、主の使者天より降り、墓の門より石を轉ばし其上に坐す、その容貌は閃雷の如く、其衣服は雪の如く白し、守兵かれを懼れ戦き、死たる者の如くなりぬ、天使こたへて婦に曰けるは、爾曹おそるゝ勿れ、我なんぢらが十字架に釘られしイエスを尋ぬるを知る、彼は此に在らず、其言へる如く甦りたり、爾曹きたりて主の置かれし處を見よ、且ゆきて其弟子に告げよ、彼は死より甦り、爾曹に先ちてガリラヤに往けり、彼處に於て爾曹彼を見るべし、我之を爾曹に告ぐ、婦懼れながらも、甚く喜びて急墓をさり、其弟子に告げんと走り往けり。

馬可傳 十六章一節より八節まで

安息日過ぎて、マグダラのマリアと、ヤコブの母なるマリア及サロメ香料を買ひとのへイエスに洩んとて来れり。七日の首の日いと早く日の出る時彼等墓に來り互に曰けるは誰か我儕の爲に石を墓の門より轉ばし取もの有んか。これ其石はなほだ巨大なればなり。斯て彼等目を舉れば石の已に轉びあるを見る。墓に入りしに白き衣を着たる少者の右の方に坐せるを見て駭き異めり。少者かれらに曰けるは駭き異む勿れ。爾曹は十字架に釘られしナザレのイエスを尋ぬ。彼は甦りて此に居らず。彼を葬し處を見よ。且ゆきて其弟子とペテロに告げよ。彼は爾曹に先ちてガリラヤに往けり。爾曹かしこにて彼を見るべし。即ち其爾曹に言しが如し。彼等いで、墓より奔れり。且慄きかつ駭き亦一言をも人に語

らざりき。是懼れしが故なり。

路加傳 二十三章五十六節より二十四章十二節まで

彼等かへりて、香物と香膏を備へ置きて、誠に従ひ安息日を休めり。七日の首日の味爽に、此婦たち備置きたる香物を携て墓に來りしに、他の婦たちも偕に來れり。彼等石の墓より轉びたりしを見て入れれば、主イエスの屍を見ず。之が爲に躊躇をりしに輝ける衣服を着たる二人、その旁に立りかれら懼れて面を地に伏せければ、其人いひけるは、爾曹何ぞ死たる者の中に生たる者を尋ぬるや。彼は此に在らず。甦りたり。彼ガリラヤに居し時、爾曹に語りて、人の子は必ず罪ある人の手に付され、十字架に釘られ、第三日に甦るべし。と云たりしを憶起よ。彼等其言を憶いで、墓

より歸りて、此等の事をみな十一の弟子と、外の弟子等に告ぐ。此等の事を使徒に告げたる者は、マグダラのマリア、ヨハンナ、ヤコブの母なるマリヤまた他に偕に在りし婦等なり。使徒その語れるを虚誕と憶ひて信せず、ペテロ起て趨り墓に往き、かゝりて梟布のかたよせあるを見て、其遇どころの事を奇みつゝ歸れり。

約翰傳 二十章一節より十節まで

一週の首の日の朝、いまだ味さうちに、マグダラのマリア墓に來りて、石の墓より取去ありしを見、遂にシンモペテロ、またイエスの愛せし所の弟子に、趨り往て曰けるは、墓より主を取りし者あり、我儕何處に置しや、其處を知らず、ペテロと彼一人の弟子いで、墓に往く、二人ともに趨る。

他の弟子ペテロより疾趨りて先に墓に至りぬ。俯て屍を褻みし布を置くを見、たれども入らず、シモンペテロ彼に後れて來り、墓に入り、褻みし布を置くを見たり、その首を褻みし手布は、屍を褻みし布と同に置かず、離れて別の處に疊みて置き、是に於て先に墓に來れる他の弟子も入り、これを見て信せり、録してイエスの死より甦るべき事あるを、彼等いまだ知らざるなり、斯て弟子は己の宿に歸れり。

第七章 昇天

使徒ルカは、使徒行傳一章三節に、夫イエスは苦難を受けし後、おほくの確據なる證を以て己の活たる事を現はし、四十日の間、かれらに見

え、神の國の事に就て語りて録して居ます。
 其四十日間の出来事に就ては、四つの傳記并に使徒行傳に詳かなれど、今昇天の事を記すに當り、只其大略だけに止め置く爲め、使徒パウロが、コリントに在る教會の信者に書き送りし書の中より、此事に關する數節を抄いて左に録します。
 わが爾曹に傳へしは、我が受けし所の事にて、其第一は、即ち聖書に應ひて、キリスト我儕の罪のために死に、また聖書に應ひて、葬られ、第三日に甦り、ケバに現はれ、後十二の弟子に現はれ給へることなり、如此あらはれ給へる後、五百の兄弟の共に在る時、亦これに現はれ給へり、其兄弟のうち多くは今なほ世に在り、然れども既に寝りたる者もあ

り、此後ヤコブに現はれ、又すべての使徒に現はれ、最後に月たらぬ者の如き、我にも現はれ給へり、蓋われ神の教會を迫害せし故に、使徒と稱ふるに足らざる者にして、使徒の中に至微者なればなり、(哥林多前書十章三節より九節まで)

十一の弟子ガリラヤに往きて、イエスの彼等に命し給ふ所の山に至り、イエスを見て拜せり、然れど疑ふものもありき、イエス進みて、彼等に語り言ひけるは、天の内地の上の凡の權を我に賜れり、爾曹徧く世界を廻りて、凡の人に福音を宣傳へ、バプタスマを施し、之を父と子と聖靈の名に入れて、弟子とし、且我が凡て爾曹に命せし言を守れと、彼等に教へよ、信じてバプタスマを受くるものは、救はれ、信ぜざるものは、罪に定めら

るゝなり夫我は世の末まで常に爾曹と偕に在るなりイエス彼等を導きてベタニヤに至れりこの處はエルサレムに近しまた彼等と偕に集り居て命じけるは爾曹エルサレムを離れずして我に聞ける所の父の約束し給ひし事を待つべし蓋ヨハナは水を以てバプテスマを施したれども爾曹は久しからずして聖靈によりバプテスマを受くべければなり集れる者かれに問けるは主よ爾いま國をイスラエルに還さんとするか彼等に曰けるは父の其權にて定め給へる時また期は爾曹が知るべき所にあらず然れども聖靈爾曹に臨むに因りて後爾曹能力を受エルサレム、ユダヤ、全國、サマリヤおよび地の極にまで我證人となるべし此事を言畢りし後手を舉げて彼等を祝す祝する時彼等の見るが間

に彼等を離れて天に擧らる雲之を接けて見えざらしめたり斯くて主は神の右に坐しぬイエスの昇れる時彼等天を仰ぎ見たりしに白衣を着たる二人の人ありて旁に立ち曰けるはガリラヤ人よ何故に天を仰ぎて立てるや爾曹を離れて天に擧られし此イエスは爾曹が彼の天に昇るを見たる其如く亦來らん彼等主を拜して甚く喜びエルサレムに歸り恒に殿に入り神を頌美また祝謝せり斯くて弟子たち徧く福音を宣傳ふ主も亦かれらに力を協せ其從ふ所の奇跡によりて道を堅うし給へり。

* * * * *

わが敬愛する讀者よ君は今聖書に録せる言葉によりて、肉体なるイ

イエスキリストの最後數日間に起りし最も不思議な出來事を讀み了り心の中に如何なる反響を受けられしか暫し黙想せられよ。

キリスト或時其弟子に向ひ爾曹は我を言ひて誰とするかと問ひ給ひしことがあります我儕は弟子ペテロが答へし如く爾はキリスト活ける神の子なりと答へますあなたは果して何と答へ給ひますか我儕は聖書に録せる次の言葉を明かに信するものであります。

イエスキリストは神の體にて居りしかども自ら其神と匹く有るところの事を棄難きことゝ意はず反て己を虚うし僕の貌をとりて人の如くなれり既に人の如き形狀にて現れ己を卑くし死に至るまで順ひ十字架の死をさへ受くるに至れり是故に神は甚しく

彼を崇めて諸の名に超る名を之に予へ給へり此は天に在るもの地に在るもの地の下に在る者をして悉くイエスの名に由りて膝を屈めしめ且もろくの舌をして悉くイエスキリストは主なりと稱揚して父なる神に榮を歸せしめん爲なり。(腓立比書二章五節)

イエスキリストは天に往きて今神の右に在せり諸の天使權威ある者能ある者みな彼に服ふなり(彼得前書三章二十二節)

イエスキリストのほか別に救あることなし蓋天下の人の中に我儕の依頼みて救はるべき他の名を賜はざればなり(使徒行傳四章終に臨みてキリストと人間との關係に就き一言申添へます)

人のよはひは草の如くその榮は野の花の如しと聖書にある如く人

人間の壽命はまことに短く不確なものでありますがこの短き壽命が實に窮なき來世の準備の爲めに神より與へられたる最も貴いものであります

キリストがもし人全世界を得るとも其生命を失はば何の益あらんやと宣ひし如く人間が此世に居る間だけに必要な物を何程澤山得ましても來世に續く永遠の生命を失ひますならば其暮した生涯は、神の與へ給ひし眞の生命に取つて失敗の生涯であります、それでキリストは爾曹まづ神の國とその義とを求めよ、さらば必需物は皆爾曹に加へらるべしとの最とも有りがたき約束を添へたる誠を人間に與へ給ひました。

然し聖書に「人皆罪を犯したれば神より榮を受くるに足らず」とありまして人間の最初の一人が一たび神に背いてより罪の性質が人の心に入り人間が皆神に背いて居るが故に、此儘では聖潔き神に見ゆるとは出来ません、即ち聖書に「人もし潔からずば神に見ゆるを得ざるなり」とあります。

我儕人間は靜に己の本心を叩いて自ら顧るといらく神の聖旨に適はざる罪の性質を認めるとが出来ます、即ち怒り、怨み、嫉み、憎み、虚言詐り、譏り、傲り、奢り、不潔、不義、不人情、其他種々の惡念邪慾が、人によつて異れども其或者は必ず心の奥底に潜んで居て機にふれては外に發して人を害し己れを傷け、本心の呵責を受けて苦むことが屢々

あります、是が我儕と神との間に自ら作つた大なる罪の塙壁でありまして、人間には元來この罪のない者は一人もありません、聖書にも「義人なし一人も有るなし」とあります、是即ち人が此世の何物を得ても眞の安心と満足の出來ない譯であります、然し人間は自力でこの罪から自分を救ふことの出來ないあはれなものであります、幸にも聖書に「只キリストイエスの贖により功なくて義とせらるゝなり」神罪を識らざる者を我儕の爲に罪人となせり、是我儕をして彼に在りて神の義となるを得しめんためなり」とあります、此言葉の意味は凡て人間が犯した罪をキリストが一身に任うて、人間の身代りとなつて十字架の上に死に給ふたとのことであります。

然しキリストは神の御子でありますから、其儘墓に葬られてしまつた御方ではありません、三日目に甦り、更に四十日の後天に昇り給ひ、今尙生きて神と偕に在して人間の爲に絶えず權威と愛とを以てはたらいて居給ふ御方であります、而して神は聖書にある如く「今は何處の人にも悔改むべきことを命じ給ふなり」此言葉は凡て萬國の民の中、未だ神の救を受けず眞の安心の出來ない人に関係のある言葉であります、それで神の救を受けける手續は如何にとならば誠に容易いことではありません、神は我儕人間の愛なる天の父でありますから、人が最も謙遜な心を以て「神よ我罪をキリストの贖によつて救し給へ」との意味を

含める言葉にて、天の父に己の罪を懺悔するならば、其瞬間に於ても
 己の罪を認はさば神は信實なる公義者なるが故に必ず我儕の罪
 を赦し諸の不義より我儕を潔むべしとの聖書の言葉に依り過去の
 罪を全く赦されて、キリストの十字架の救の能を實驗し子よ心安か
 れ爾の罪赦されたり「爾の信爾を救へり安全にして往け」との嬉しき
 御言葉を聴き我は今罪を赦されて神の子供とせられ其名を天の名
 簿に録されて永遠に向ふ生命を興へられたとの確い信仰を興へら
 れ又其瞬間に神の靈は心の裏に宿りてすべての罪に打勝つ能を興
 へられ眞の安心と喜びと望みに満されて最も愉快に活動する生涯
 が始まるのであります。

明治四十一年八月十五日印刷
 同 年八月二十日發行

編者 廣島市下中町二十四番地
 エツナ、リンドストロム

編者兼 廣島市天神町百廿一番地
 發行者 堀江 議 作

印刷者 東京市京橋區銀座四丁目一番地
 デー、エス、スペンサー

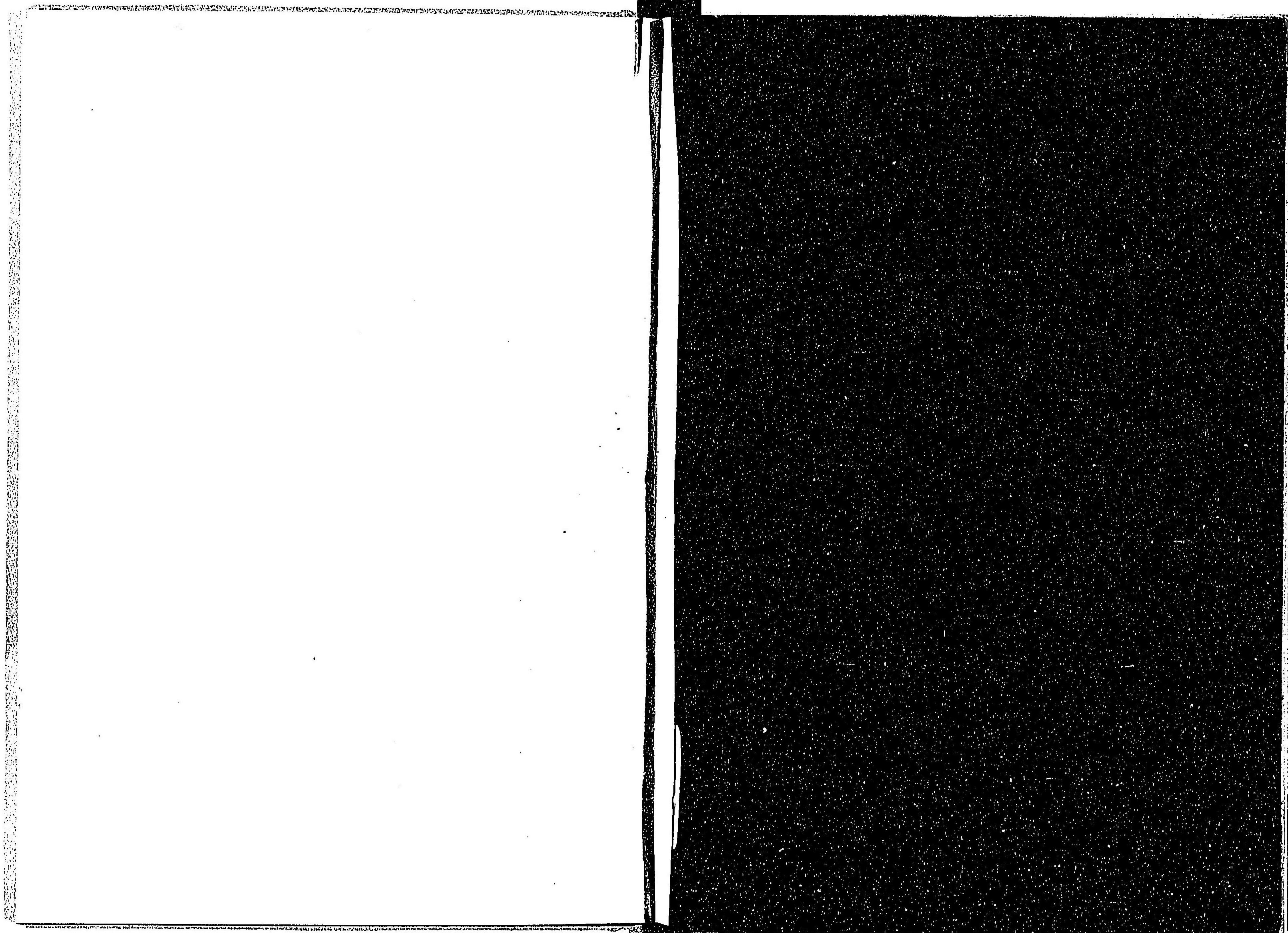
印刷所 東京市京橋區銀座四丁目一番地
 教 文 館

發行所 廣島市 廣嶋アライアンス教會
 天神町

258
774

中華民國二十八年八月廿五日

清
江
蘇
省
政
府
印
發
第
一
一
一
號



特45

2

イエスキリストは誰か

国立国会図書館

020225-000-7

特45-2

イエスキリストは誰か

エッチ・リンドストロム

堀江 議作 / 編

M41

ABI-0027

